

Sayerは英語でのニックネーム。
本連載では、生物学を中心とする
自然科学の“研究という場”について考えてゆく。

生物学と宗教のかかわり

宗教と医学の対立

前回(2009年7月号)は、生物進化学における考え方の変遷を簡単に振り返ってみた。今回は、生物学がその長い歴史のあいだに、いかに宗教とかかわってきたのかを考えてみたい。どうして宗教が登場する必要があるのか、と思う方もいるかもしれない。しかし、少なくとも生物進化の分野に関していえば、現在でもアメリカのいくつかの州では、進化の考え方を学校で教えることを禁じているのである。キリスト教の教えに反するからだという。

進化学はちょうど200年前の1809年に、ラマルクがはじめて進化論を発表して始まったが、それ以前の生物学でも、宗教との対立はあった。その最大のものが医学である。人間の病気を治す方法を研究する医学では、当然ながら人間の肉体を詳しく知っておく必要がある。このため、医学教育では人体解剖が必須となっている。現代の私たちにあって、それは当然受け入れられる考え方だ。ところが、霊魂や死後の世界の存在を前提とするキリスト教からみると、解剖という死体を切り刻む行為は、反宗教的だった。さらには、キリスト教の権威が絶大だったヨーロッパでは、解剖だけでなく、医学全体が教会から弾劾されたのである。

13世紀のことが、ドミニコ修道会は医学に関する書籍を追放し、ローマ教皇ボンファティウス8世は人体解剖を禁じた⁽¹⁾。16世紀に活躍したヴェサリウスは、現代に続く人体解剖学の基礎を確立したが、彼も宗教からの弾圧の犠牲者の一人となった。しかし、彼の解剖学は当時の医学者から大

きな賞賛を浴びており、宗教的権威に曇られることなく、科学の真理を追究しようという姿勢は、ルネッサンス以降、脈々と受け継がれていった。

医学への宗教からの反発は、別の分野でも頻繁に生じた。ジェンナーが18世紀末に発見した種痘は、医学の偉大な成果のひとつと考えられているが、宗教界から、病気は人間の罪を罰するために神が与えたものだから、それを予防するのは悪魔の仕事だという反論があった⁽²⁾。また19世紀に、出産の際に妊婦の負担を軽減するために麻酔薬の使用が始まったときには、女性が受けるべき本来のろいの一部を取り除こうとする行為はけしからぬという非難を浴びたという⁽³⁾。

斎藤成也

(さいとう・なるや) 1957年福井県生まれ。1979年東京大学理学部生物学科人類学課程卒業、1986年テキサス大学ヒューストン校生物学医学大学院修了(Ph.D.)。1989年東京大学理学部助手、1991年国立遺伝学研究所助教授、2002年同教授。総合研究大学院大学遺伝学専攻、東京大学大学院生物科学専攻教授を兼任。日本学術会議会員。専門分野はゲノム進化、人類進化。

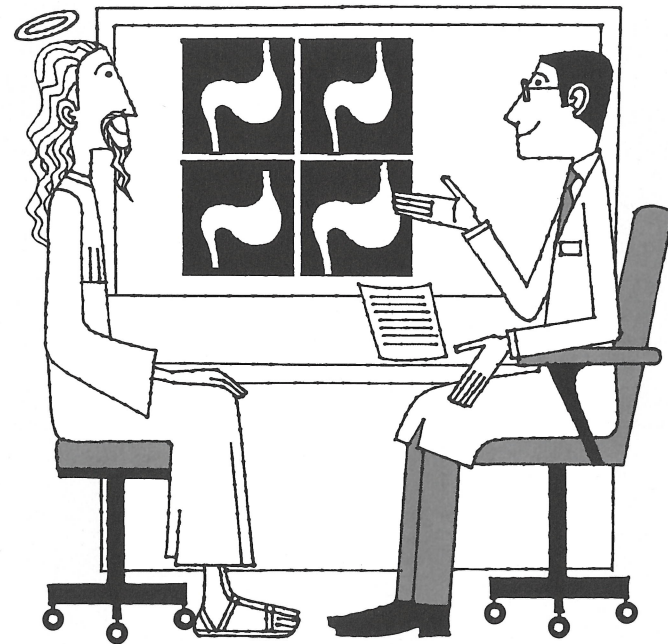


Illustration / Masaaki Hosoda

21世紀の現代でも、輸血という医療行為を聖書の教えに反するとして受け付けられない宗派が存在する。宗教と医学との対立はまだ終わっていない。

信仰をもった生物学者たち

私は1982年から4年間、アメリカ・テキサス州のヒューストンにあるテキサス大学の大学院に留学した。“中立進化論”に深く傾倒していたので、アメリカにおける中立進化研究の牙城であった、根井正利教授*の研究グループに参加したのである(中立進化論については前回7月号を参照されたい)。

いまから25年以上前のことだが、アメリカにおける宗教と生物学の関係は、当時も

いまもそれほど変化していないと思う。いろいろな講義のひとつに、人類遺伝学があった。二人の教員が講義を担当していたが、その一人だったジャック・シャル教授は、近親婚など人類集団内の話を中心でありながら、当然のように人類進化の話にもふれた。ところが、もう一人の担当教員は、人類集団のなかの話に終始し、人間と類人猿との遺伝子の比較などの話は一切しなかった。彼は、生物進化を認めないキリスト教系宗派の信者だったのである。まわりでいろいろな生物進化の研究が進められていることに違和感を感じていたのかもしれない。

アメリカはつくづく不思議な国だと思う。いろいろな宗教の人がいるのに、大統領の就任式では、必ずユダヤ教・キリスト教の聖書に手を置いて宣誓をするし、コインには「God in Trust」と刻んである。

もっとも、アメリカだけではない。最近、私が専門とする“人間の遺伝的多様性”調査のため、多民族国家であるマレーシアを訪問した。そこでは、なんと憲法のなかに、主要民族の一つであるマレー人の定義として、イスラム教徒であることを含めているのだ。人間(民族)を憲法で定義するというのがそもそも不思議だが、さらにその定義にどの宗教を信奉しているのかがあるというのだから、世界は多様である。

ただし、マレーシアの研究者にただしたところ、原理主義的な一部のイスラム教宗派とは異なり、マレーシアのムスリムは穏健なので、生物進化の考え方を受け入れているとのことである。少々ほっとした。“人間の遺伝的多様性”を論じるときには、ヒトの近縁種であるチンパンジーやゴリラなどの類人猿のゲノムとの進化的な比較が必要となるからだ。

キリスト教は、大きく旧教(カトリック)、新教(プロテスタント)、ロシア正教に分か

* 根井正利
1931年宮崎県生まれ。宮崎大学卒業、京都大学大学院修了(農学博士)。1969年に渡米。ブラウン大学、テキサス大学ヒューストン校を経て、1990年よりペンシルヴァニア州立大学生物学教授・分子進化遺伝学研究所所長。国際生物学賞受賞。米国科学アカデミー会員。

参考文献
[1] Andrew Dickson White:「科学と宗教との闘争」森島恒雄訳、岩波新書(1968)
[2] Charles Robert Darwin:「ダーウィン自伝」八杉龍一・江上生子訳、筑摩書(1972)

れるが、遺伝子の進化を研究している私の研究室には、これまでに2名のカトリック信者が在籍したことがある。どちらも問題なく生物進化について研究していたが、片方の人に、信仰と研究に矛盾はないのかと、一度聞いてみたことがある。残念ながら、明快な解答は得られなかった。

カトリックの総本山であるバチカン、前法王ヨハネパウロⅡ世がガリレオの宗教裁判については正式に謝罪し、地動説を受け入れた。もっとも、「それでも地球は動く」と言ってから400年以上過ぎてからだから、さすがにしぶとい。一方、提唱から200年ほどしか経っていない生物進化の考え方は、まだ明確に譲歩してはいないらしい。カトリック信者にとっても、一部の原理主義のキリスト教徒ほどではないが、多少は気にかかる問題なのかもしれない。

宗教から遠ざかる世界のなかで

ダーウィンは自伝のなかで「あらゆる事物のはじめという神秘は、われわれには解きえない。私個人としては不可知論者にとどまざるをえない。」と述べている⁽²⁾。

私は「不可知論者(アグノスティック, agnostic)」という言葉が十数年前にはじめて知った。日本とドイツの人類学研究者がベルリンでセミナーをしたときに、日本側の代表だった文化人類学者の増田義郎氏が、日本人だけの食事で宗教観が話題になったおりに、「日本人の大部分は、無神論者というよりは不可知論者と言うべきです」と言われたのである。「無神論」は、積極的に神など存在しないと主張する考え方であり、「不可知論」は、創造神という絶対的存在にまつわる霊魂の不滅性や死後の世界、幽霊などを、われわれは知ることができないという、いわば消極的な立場である。

“アグノスティック”は、実はダーウィンの進化論を擁護し、人間と類人猿の比較研究を推し進めたトーマス・ヘンリー・ハクスリーの造語である。ギリシア語でグノーシス(gnosis)という、知識、とりわけ精神に関する知識を意味する言葉に“a”をつけてそれを否定したものだ。

当時は私も、なるほど、自分はたしかに不可知論者だなと思ったものである。しかしいろいろと科学と宗教のことを長年考えているうちに、どうやら自分は積極的に神を否定しているという立場にあることが、だんだんはっきりしてきた。ということで、私は無神論者である。

21世紀の現在、生物進化を研究している人のほとんどは無信仰である。これまでいろいろな国の進化学研究者に、宗教について質問してきたが、みな無信仰だった。フランスの共同研究者である分子免疫学者のアントワヌ・ブランシャール教授によれば、フランスでは教会に行く人は世代を追うごとに激減しているという。おそらくヨーロッパ全体でそうなのであろう。日本でも、葬式や法事でお寺にお世話になることは数十年前に比べれば明らかに減少している。世界全体として宗教とのかかわりが薄くなりつつあるのではないだろうか。この宗教離れの最大の原因は、なんといっても自然科学の勃興である。天空の星々と地上の小石が、同一の自然法則にしたがっているとわかったとき、天の神聖さは地に落ちた。

犬や猿などのけだものと、われわれ人間が進化の流れでつながっていることがわかったとき、人間だけが精神をもっているのか、あやしくなってきた。このように、宗教離れの世相には、生物進化学がかなり貢献したのである。進化学の研究者としては、誇らしい限りだ。